『王宮広場』におけるアリドールの愛

小　林　　卓

1

アリドールとアンジェリックは1年ほど前から[1]愛しあっていて、今では深く確かな愛が二人を堅固に結びつけている[2]。二人の愛をひき裂くような障害――親権者の反対や富の不等などはみあたらない上に、アンジェリックは若く美しく純良な魂の持ち主[3]、アリドールはさっそうとした青年貴族[4]であって、彼等の愛は申し分のない完全な結合であった。ところが、この一点の曇りも認められない愛にむかってアリドールは謀反をおこす。二人の愛が破れるべき障害はどこにもなく相互に深く愛しあっていたにもかかわらず、アリドールがアンジェリックとの愛を破棄しようとしたことによって愛は破綻におちいる。

アリドールが示した理不尽な愛の破棄は、言うまでもなく批評家を悩ましく様々な議論を招いてきた。そして、このような彼の決心をいかに解釈するかということは、『王宮広場』の解釈の鍵となるとともに[5]、コルネイユ研究上一つの焦点をなしている。それは、アリドールがコルネイユの悲劇を色どる一連の「コルネイユ的英雄」の先駆者とみられることが多いためである。アリドールの愛の破棄は単に不可解な恋愛心理にとどまらず、「コルネイユ的英雄主義」をめぐる煩瑣な議論を常によびおこしてきたのである。

アリドールを「コルネイユ的英雄」と初めて結びつけたのはルメートルである。彼は「コルネイユ的英雄」にみられる常軌逸脱や不合理な側面を示した典型としてアリドールをあげたのであった。ルメートルはアリドールに否定的評価しか与えておらず、英雄主義に関する奇妙で誤った観念の一事例としてであった[6]。だが、近年コルネイユの英雄主義についての研究の高まりとともに、アリドールの愛の破棄をエロイックなものと積極的に評価しようとする傾向が目立ってきた。ナダル、ドルト、ドゥブロフスキーなどがそうである[7]。ルメートルに代表されるように合理主義的な19世紀にはアリドールは断罪を受けたが、今日では彼の名誉回復が進行している。たとえば、17世紀を扱った最も権威ある文学史において「『王宮広場』において、初めてコルネイユ的英雄主義が現われる。もっとも、まだ目的を見つけていない英雄主義ではあるが。」[8]と記述されているように、アリドールをコルネイユ劇で初めて明確に登場した「英雄」或いは「英雄」の先駆者と認めるのは文学史の常識と化しているほどである。

だが、文学史的常識はあまりにも大略に過ぎて真実が隠れてしまうこともしばしばである。先の

文学史的常識を覆そうとは思わないが、少なくともアリドールと「英雄」の問題はきわめて微妙な、取り扱いに注意すべきものであることは言えよう。先のアダンの言葉も示しているように、アリドールの英雄主義といっても留保つきなのである。アリドールが「英雄」として完全な自己実現を果たしていないことは、ドルト、ドゥブロフスキー、ナダルも認めており、従って正確には「英雄」の先駆者と言われているのである。

アリドールを「英雄」として積極的に評価するか、「英雄」としてもルメートルのように負の「英雄」とみるか、或いは「英雄」とは全く認めないか、そのいずれを正しいと判定するかを拙論の目的としようとは思わない。それぞれの見解は部分的真実を含んでいる。ここでは、そのような主張の根底となっていること----アリドールによるアンジェリックとの愛の破棄 ---- が一体どのようなものであったかを検討してみたい。このような検討にとって、アリドールをめぐる「英雄」論議は誤った先入見を与えかねない無益なものである。

これまでの研究によって明らかとなったことは、アリドールは『王宮広場』で突如として出現した人物ではなく、処女作『メリート』以来初期喜劇を通して続き発展していったテーマの必然な到達であったことである。愛を主題としたコルネイユの初期喜劇に一貫するのは、愛が自己の確証を求める執拗な運動である。それは、さまざまな曲折を経たあげくきわめて逆説的な結論に達する。『未亡人』に登場するセリデーが相思相愛の仲であったリザンドルを故意に捨てたのがそれである。

> 「リザンドルがどんなに値うちがあるか、棄ててみればよくわかるはず。あゝ、失うものの大きさがもう私をさわがす。まだ決めかねる心を決めるために、ことさらリザンドルをないがしろにして、彼がどうするかを見てみよう。彼の愛が本当かどうか、このお芝居でわかるはず。」(9)

セリデーは愛を捨てるふりをして相手の反応をうかがい、それによって彼等の愛の確かさを測ろうとしたのである。愛を試練にさらすことによって愛を確証しようとすることは、中世の騎士道文学以来の伝統である。ナダルは、「試練の観念は愛に無縁ではない。騎士道ではそれがいつも掟であった。愛が確固となり自らを超越するのは、ただ規律を自己に課することによってである。試練を求めるのは不安、警戒心、疑いなどではない。ましてや、愛の薄弱などではない。むしろ、熱情、忠誠、より高度な魂が試練を求め愛の唯一つの最上の確証としてそれを喚起する。」(10)と言っている。セリデーの独創は、愛の試練を愛の破棄によっておこなったことである。ナダルの注解に従えば、セリデーの求める深い愛、真正な愛を求める激しい情熱が愛に愛の破棄という試練を課したわけである。真実に深く愛するがゆえに愛を否定するという愛の背理をセリデーは発見した。

もっとも、彼女は愛の背理を徹頭徹尾追求しようとしなかった。リザンドルとの愛の破棄は一時

的な芝居にすぎない。リザンドルが本気にしはじめると、セリデーはたちまち芝居を打ち切って彼女の愛を復元するのである。それに対して、アリドールは愛の背理を完遂する。ナダルはアリドールの行為を次のように評している。「真実の愛が悲劇の全体をなしている。愛が高邁な魂を滅亡や自己逸失の危険におちいらせかねないことは深く真実である。魂が偉大で美しければ、それだけ一層危険は大きい。そこで、傲慢、自尊心、虚栄、浮気心などからではなく、愛こそがアリドールを謀反に駆りたてたのである。愛こそが彼にアンジェリックの放棄というエロイックな決断を命じた。」[11]アリドールの意図は、愛にまぎれこみがちな不純な爽雑物を除いて、愛に絶対的無償性を回復させその純粋な源泉に立ち戻らそうとすることであった。即ち、愛以外の何物でもなく、ただ愛のみが彼に愛の破棄へむかわせた。愛のゆえに愛を否定する愛の背理という観念を洗練し駆使することによって、ナダルはアリドールの愛の破棄を愛の行為としたのである。そして、アリドールは、ポリュークトなどにみられる「英雄的愛」を予告する[12]高邁な愛の観念にみちびかれた魂とみなされた。

このようなナダルの分析は、愛の形而上学の精妙を縦横に駆使したものであり。それだけに巧妙精緻な仮構のようにみえる。愛の背理という観念などその一例である。真に愛しているならば愛を破るのではなく愛し続けるべきではなかろうか。ナダルにしても、アリドールの愛に破産がみられることを忘れてはいないが[13]、アリドールの過大評価は頂点に達したと言えよう。ナダルとは別の角度から、アリドールの愛を考察してみる必要があろう。

2

コルネイユの初期喜劇が写実的であることは周知の通りである[14]。そこで、初期喜劇に描かれた愛は当時の社会にみられた愛でもあったのであり、１７世紀における愛や結婚とは何であったかをみる必要がある。モングレディアンは１７世紀の結婚の有様を次のように述べている。「１７世紀における結婚とは何であったか。それは一つの契約、ほとんど常に取引であり二つの家がとりきめた財布の結合であった。考慮に入らなかった唯一のものは当事者達であった。若い花嫁が結婚の適齢に達したかどうかの若さで、心は閉じられたほとんど意志のない子供にすぎないこともあった。ところが、命じられた結婚を拒否しようとしたら修道院に入るしかなかった(略)。当然の結果として、きわめて多数の不似合いな夫婦が生まれた。結婚生活において、最もよい場合で無関心、多くの場合憎しみや敵意が支配した。」[15]これは貴族や上層ブルジョワジーなどの階級の結婚を言っているのであろうが、コルネイユが描いたそれらの階級の結婚は何よりも財の取引であり、個人の意志や感情によってではなく家によって決められたのである。このことは初期喜劇からいくらでも実例

を拾って示すことができる[16]。結婚が愛の結合というより財布の結合として存したことは、当時の愛の様式を決定的に規定することとなった。

ドルトは「１７世紀のブルジョワにとって愛とは所有の謂であり、彼等に共通した社会的上昇の手段であり保証であった」[17]と述べている。これをパラフレーズすれば次のようになろう。商品経済の発展に応じて次第に上昇し地歩を築いていったブルジョワジーは、１７世紀初頭にはその上層は新興貴族として不動の地位を得るまでに成長した。ブルジョワジーにこのような社会的上昇を可能とさせたのは言うまでもなく富の増殖蓄積である。富の増大とはブルジョワジーの存在理由であるとともに、彼等の社会的上昇を達成させる手段でもあったのである。それ故に、ブルジョワジーの生存目的であり至上命令であったと言えよう。富の増大は土地、官職の購入や諸種の定期金契約(ラント)の設定等を通して実現されていった。直接的な富の増殖のみならず土地、官職、ラントの獲得などを一括して所有の増大と言うならば、結婚＝愛も所有を増大する一つの機会として考えられていたのである。結婚＝愛は第一義において上述したような経済的物質的意味において存したのであり、これが愛とは所有であったという意味である[18]ドルトの「所有」[19]としての愛という概念は、１７世紀における愛、ひいてはコルネイユの初期喜劇における愛を分析するにはきわめて有効である。ドルトの定義によれば「所有」の愛は本来ブルジョワジーに由来するのであるが、このことは「所有」の愛がブルジョワジーにのみ限られることを意味しはしない。１７世紀には貴族階級の広範な没落が進行し、実質的にはブルジョワ化していたから、それは貴族階級の愛でもあった。１７世紀において、少なくとも上層ブルジョワジー以上の階級における愛は、所有の増大という要求を実現すべき好都合な機会として存在したのであり、その結果、結婚は経済的至上命令の体現した「家」の要請によって結ばれ各人の個人的な欲求は圧殺されねばならなかったのである。「家」の要請の前に自己の意志や感情を殺すことがむしろ義務とされて社会的規範となっていたのはその故である。

『王宮広場』で、「所有」の愛を典型的に実践するのはフィリスである。彼女の恋愛と結婚の有様をみれば「所有」の愛とは実際にどのようなものであったかが納得されよう。フィリスは彼女の恋愛作法を次のように述べている。

> 「私はどの人をも愛することができるからどんな人でも無視しない。私に近づいてくる人は誰でも私の気にかなう理由を持っているのだから。こうすれば、何もかもうまく運ぶ。誰でも私の心にかなうから、うるさくつきまとう人なぞいはしない。言い寄ってくる人どうしが互いに焼もちをやくだけ。私の心はみんなのものでただ一人のものではない。」[20]

このような恋愛は愛というより遊戯としか言うことができないが、フィリスにはそれで充分なの

である。彼女にとって恋愛はplaisirを探索する場にすぎない。恋愛が結婚へ移行する可能性はないからである。一方で、結婚は家のとりきめる重大な契約であるから、彼女は結婚について義務に従う模範的な娘となる。すべてを親の選択にまかす。

「こんなにも多くの色々な人のうちの誰かが両親の意にかなわないはずはない。たとえ、親の気まぐれが見も知らぬ人を私と結びつけようとしても、気がふさいだりはしない。そんな人でも、私が愛した誰かに幾分でも似ているはず。私は、どんな夫でも喜んで受け入れることができる。」(21)

次に彼女とクレアンドルがどのようにして結婚するか見てみよう。クレアンドルはアンジェリックを誘拐しようとしたが、誤ってフィリスをかどわかしてしまう。クレアンドルは窮地に立った。これが露見すれば、一人の娘を誘拐した罪をきせられてしまう。それを逃がれるには彼女を妻とするしかない。不手際な誘拐を相愛の男女がたくらんだ密行のようにみせかけようとするのである。そこで、フィリスの兄が激昂して彼の命をねらっているのをものともせず、フィリスを伴ってクレアンドルは白昼堂々と帰ってくる。その道すがら、彼はフィリスを口説きはじめる。

「あなたがどんなに無視しようとしても、御自分の名誉をおもえば私の願いを聞くはずです。過ぎし半夜、私のとらわれ身となっていたことは口の悪い者に変な疑を与えるでしょう。どんな噂をされるか考えてもみなさい。」(22)

フィリスにしても名誉が窮地におちいったのであるが、彼女にも気位があった。

「そんな噂をたてないために、あなたと結婚する必要があるとでもいうの。むしろ、結婚すれば何もかも私に不利なように言われる。あなたの申し込みをはねた方が、私達の間には何もいかがわしいことはなかったと思われるでしょう。」(23)

しかし、クレアンドルの申し込みを拒否したのではない。彼女は両親の返事に服従することで実質的な同意を与える(24)。クレアンドルの申し込みを了承したのはただ名誉への配慮からばかりでなかったことは、召使いのリカンドが兄のドラストに言っている言葉をみれば明らかである。

「あなたの妹がクレアンドル様ほどの財産を望むのはなかなかできないことです。あの方の財産の多いことを思えば、あなたさまにもあの方を愛せましょう。あの方を誘拐者から夫にしておしまいなさい。」(25)

「所有」としての愛の見地からすれば、クレアンドルの申し込みはフィリス側にとって異議をはさむ余地のないものである。ドラストも両親も同意したのは当然であった(26)。こうして、まったくの偶然がフィリスとクレアンドルを結びつけたのである。このような結合が永続するのだろうかといった疑問が浮かぶかもしれないが、それは現代人のもつ疑問であって、当時の通念からすれば二

人の結合は正真正銘の愛であり永続的なものであった。１７世紀において、真実で実現可能な愛とは「所有」としての愛しかなかったからである。そして、注目すべきことに「所有」の愛は決して破れることのない強固な結合だったのである[27]。

3

前述したように、アリドールとアンジェリックの愛は深く堅固であった。そして、愛の深さと強さがアリドールに苦悶を生じさせたのである。

「アンジェリックが死ぬような苦しみを与えるのは、あまりにも僕を愛してくれるからなのだ。彼女にほんの少しの冷淡さでもみえたらこの病から癒えていただろう。不興げな眼ざしや僅かの嫉妬があったならば、僕の想いはすぐに彼女から遠のいてしまっていたことだろう。だが、何と、彼女は完全無欠なのだ。そして、彼女の愛といったらその完全無欠も及ばぬほど深い。」[28]

愛されすぎていることに、愛のあまりの完璧さに不平を抱く奇異な恋する者――アリドールは、苦悶の理由を次のように言っている。

「あゝ、僕の不幸は、あまりに情の深いひとが僕の意にかかわりなく絶対的に僕を支配していることだ。」[29]

アリドールによれば、アンジェリックの愛は彼の心を専横にわがものとする忌むべき圧制であり、アンジェリックによるアリドールの支配に他ならなかった。彼女の愛の完璧さは支配の完全さとなり、それだけ一層アリドールの苦悶は大きくなるのであった。彼の心が自身の手綱を離れてアンジェリックに操られている様は次のように述べられている。

「僕のおもいは彼女としか語ろうとはしない。僕の喜びはただ彼女の眼ざしにしかないようだ。僕の足先は彼女以外の方向へ向かおうとはしない。私の心から自由はすっかり失われてしまい、私の弱さと彼女の圧制がまざまざと見られるばかりだ。」[30]

自分の心が自己ではなく他者によって支配されるのは我慢のならない嘆かわしいことであるから、そのことにアリドールが死ぬような苦しみをもつのは当然かもしれない。しかし、彼の言うアンジェリックの圧制 tyranie は見方を変えれば愛のあかしであり現実ではなかろうか。愛が必然的に招来する個の自由の喪失を受容することができないで、圧制とか拭うべき恥辱[31]であるとするのは、アリドールの側の事情であって、アンジェリックやアンジェリックの愛の罪などではない。では、アリドールの側の事情とは何であろうか。それは、アリドールの理想の愛がどのようなものであったかを見ることによって明らかとなろう。

「僕は、愛の鎖のただ中にあって自由であることを望む。われわれを支配するような愛人に仕えるべきではない。われわれの意に従わない愛をはぐくんではならない。強制となる愛を僕は嫌う。愛において、僕の恋心のすべてが意志に依ることを欲するのだ。恋の炎が僕を拘束したりせずに僕に従い、思いのままにそれを増したり減じたりすることができ、いつも自己の主となって、好むときに愛を与えたり取り下げたりしたいのだ。」(32)

彼の理想とする愛とは、初めの1行「愛の鎖のただ中にあって自由」libre au milieu de ses fers の句に尽くされている。アリドールは愛よりも自由を尊んだのであり、彼は自由のために愛を棄てたのだという誤解がしばしば見受けられるが、彼の言葉を正確に読みとればアリドールは愛と自由の両立を願っており、愛しつつも自由でいることのできる愛を求めたことがわかるであろう。ところで、彼が理想とするような愛とはどんなものであり、また存在し得るのであろうか。ナダルは、そのような愛とは激しい愛に燃焼しつつも決して個我の自由と独立を失うことのない愛――高度の精神性に裏打ちされることによって肉欲という起源から昇華された愛――即ち、「英雄的愛」であると考え、アリドールの愛しつつも自由である愛とは「英雄的愛」を指向したものとするのである(33)。「英雄的愛」という観念の妥当性はさておき、またロドリグ、シメーヌ、ポリュークトなどの愛を「英雄的愛」として認めることができるとしても、アリドールの愛にまで「英雄的愛」を適用することはアリドールへの買いかぶりもはなはだしいのではなかろうか。彼の愛の理想の背後に認められるのは、高度の精神性などではなくエゴイズムであり身勝手な虫のよい要求でしかなかろう。他者との合体を進んで引き受けることによってそれぞれの個別性を解消し、それぞれの個という二つの水たまりを合流させることが愛であると言えるならば、愛を「思いのままに増したり減じたり」(34)、あるいは「好むときに愛を与えたり取り下げたり」(35)しようなどとすることが愛の理想のなかに入る余地はないはずである。それがどのような愛であれ少なくとも愛であるかぎり、愛しつつも愛を破る自由をも保持することを理想とするものではない。愛と自由の二つを手に入れようとするのは身勝手なわがままであり、そのような要求は真実の愛とは無縁なものであり、愛の理想などでは絶対にあり得ない。アリドールが長広舌をふるって述べたてた理想の愛とは彼の身勝手さが生みだしたあつかましい要求の表現でしかなく、ナダルのように高遠な理想的愛などをひきだすべき種類のものではないのである。

しかし、アリドールの愛の理想は、コルネイユの賛同を得た純正な愛であるとの異論がでるかもしれない。その論拠は、『王宮広場』の巻頭に付されたコルネイユから匿名人にあてた献呈文中にアリドールと同一の愛の観念がみられることである。そこで、この点について触れておきたい。

献呈文中に表現された愛とは次の通りである。「私があなたから学んだことは、honnête homme

の愛は常に意志的でなければならず、愛さぬことができないほど愛してはならず、もしそのような場合には愛は軛を放つべき専制であるということです。つまり、盲目の性向やわれわれには抵抗できない何ものかによって生まれる愛よりも、われわれ自身の選択と愛人の長所が生みだす愛にたいして愛人は一層の恩義をもつということです。」[36]これがコルネイユの真意であるならば、アリドールの理想の愛はコルネイユ自身のものでもあり、アリドールの理想により肯定的な解釈を下さねばならないであろう。だが、コルネイユはアリドールの考えが自己のものとは見なされないように注意深く断り書きをしている。「献呈文としては度を越えそうだ。まるで、私のアリドールの正当化を私がくわだてたかのようだ。(略)詩人は、その登場人物に与える思想には決して責任をもたない。」[37]更に、献呈文そのものがコルネイユの仮構とみられるべきものなのである[38]。従って、献呈文にみられる愛の観念をコルネイユの真意とみるのは根拠薄弱と言わねばならない。また、『王宮広場』には初版で l'amoureux extravagant という副題をそえられていたが、このことはアリドールがコルネイユに援護された人物ではなかったことを例証していよう[39]。アリドールをコルネイユの代弁者のように見なすことは、以上のことからできないのである。

アンジェリックの愛を圧制と感じ、愛における自由喪失を忌まわしい隷属とみなしたのは彼の抱いた得手勝手な理想の愛のゆえだったのであるが、次にこのような特異なアリドールの心理の意味するところを考えてみよう。

アリドールが圧制、隷従、自由喪失などの語で表現しているアンジェリックとの愛にひそんでいる耐え難いものとは、彼等の愛に内包されている「所有」であったとおもわれる。彼等の愛が何の外部的障害にもあわずに順調に進行してきたことは前述した通りであるが、それは当時における愛の現実的形態であった「所有」としての愛に彼等の愛が完全に理想的なまでに合致していたからに他ならない。二人の結合は所有の増大という彼等の生存目的にかなっていたために、正当な愛として社会的公認をうけることができたのである。そして、今や結婚によって所有の増大という物質的要請は完全に実現されなければならないのであって、結婚という結合をむすぶことは二人の義務となっていた。当時の人々は愛において「所有」を優先し、「所有」の論理の前に自己の意志や感性の主張をとりさげるのは義務であったからである。もっとも、どんな夫でも喜んで受け入れようとするフィリスに較べるならば、アリドールとアンジェリックは幸運であった。彼等の感性の主張は「所有」の要請と対立することなく一致しており、彼等はそれぞれの意志と感性を犠牲にすることなく義務に従うことができるからである。アリドールは自己放棄という苦痛を払うことなく、アンジェリックと結婚するという義務を果たすことができた。だが、彼等の愛が基本的には「所有」として成立しており、二人の個我ではなく「所有」が彼等の愛を第一義に規定していることをアリド

ールは敏感に感じないわけにはゆかなかった。「所有」が彼等の自我よりも優先している状態が、アリドールの心理に圧制、支配、強制、自由剝奪となってあらわれたのである。

「所有」が自我より優先していることはアリドールにとって耐えることのできない恥辱であったが、それは彼が自我を至上なものと重んじたからと言うより「所有」を嫌ったからである。彼には「所有」がいまわしいのである。結婚という「所有」の完全な終極的実現が間近にせまっているとき、「所有」を避けるには愛を破らなければならない。

「結婚が強制の愛を義務の愛に変えてしまいそうだから、どのような代償を払っても愛の鎖を破ろう。」(40)

愛が「所有」としてしか存しなかったときに、アリドールは「所有」へ反発したわけでこのことは周りの者にとって思いもかけない予想外なことであった。クレアンドルとアンジェリックがそれぞれ次のように言ったのも当然である。

「君は、君の心が崇拝している人を所有(41)するのが恐ろしいのかい。」(42)

「アリドールは(あゝ、なんという恋人でしょう)私を所有しようとしないとは。」(43)

アリドールのもった「所有」への反発がアンジェリックとの愛の破棄を生じさせたのであるが、アリドールにみられるもう一つの特徴は自己優越意識である。たとえば、次のような台詞がみられる。

「君は僕の心をありきたりなものの数にでも入れているのか。僕の感情が平凡な感情にとどまっているとでも思うのか。」(44)

このことから、彼の優越意識が「所有」を卑俗なものとさせ「所有」を受け入れることのできないものとしたと考えられる。それは、ドルトの言うように(45)、貴族の光輝に魅了されたブルジョワが「所有」というブルジョワ性を拒否することによって貴族へ脱皮しようとしたことを意味したのかもしれない。それにしても、彼の意図は何であったのだろうか。「所有」ではない愛を創建しようとしたのか。「所有」への反発は愛における「英雄主義」を意味するのであろうか。このような問に答える前に、アリドールの行動から彼の正体を明らかにしておかなければならないだろう。

4

アリドールがアンジェリックとの愛を破棄するには、彼自身が決意し彼女から遠ざかってゆけば足りるはずである。だが、彼の感性をくすぐるアンジェリックの抵抗し難い魅力のために、彼女から遠ざかろうとするアリドールの意志は機能不全におちいっていた。彼女との愛を破ろうとする決意は意志となって現実化するまでに至らないのであって、アリドールに、愛に対する意志の勝利という古典的な「コルネイユ的英雄主義」の図式を適用することはこのことからもできないのである。

アリドールの意志は弱々しく、感性に敗退するものでしかない。それでは、いかにしてアリドールは愛を破棄するのであろうか。アンジェリックを攻撃することによってである。

「他の方法で自己を守ることができないのは、彼女の魅力にやすやすと降参してしまうからだ。でも、彼女の愛は僕に大きな苦痛であるから、彼女を攻撃して憎しみをかいたいのだ。」[46]

こうして、自分で解決すべきことを解決できないで、アリドールはそれを他者に転嫁する。自分が支払うべき感性の抹殺という代価をアンジェリックに払わせようとするわけで、これは真に「高邁」[47]な精神のなすことではあり得ない。アリドールは出発点において「高邁」から脱線しているのである。

アリドールのした攻撃とは、彼がアンジェリックとの愛に離反したことをあらわす他の女に宛てた恋文を彼女の眼にいれたことである。アリドールの愛への不忠を知ったアンジェリックは衝撃を受ける。そこへ現われたアリドールは一層彼女を挑発し怒りをあおりたてる。彼女が憤激して恋文[48]をひきちぎるのを見て、アリドールは言う。

「お追従を耳にしなければ、あなたは気持を害する。卒直にあなたに魅力がないと言うことが、すぐにひきちぎられなければならないような恐ろしい重罪なのだろうか。」[49]

さらに、彼女のバンドに吊り下げられている鏡を彼女の顔前にかざして侮辱を加える。

「その罪が他の方法で償うことができないのなら、この鏡もこわしなさい。私の手紙よりもこの方がもっとあなたの欠点を話している。」[50]

このようなアリドールの仕打ちに動転したあまりに、アンジェリックはかねてより彼女に恋していたドラストの求婚を承諾する。彼女をクレアンドルに譲る約束をしていたアリドールは、彼女をクレアンドルの手に入れさせるために再び策略をめぐらすことになる。初めに、彼女の恋心にもう一度火をつけようとする。

「あのような手紙にもかかわらず、私のあなたへの愛に変りはありませんでした。あの手紙は、もともとあなたの手に入るものだったのです。手紙を読んであなたがどんな反応をみせるかで、あなたの恋心のほどを調べようとしたにすぎません。」[51]

アリドールへの愛を捨てることのできなかったアンジェリックは[52]、彼の言い訳をうけ入れる。しかし、アンジェリックにとってアリドールの愛の回復は何の意味もなさなかった。ドラストとの結婚は明日にせまっており[53]、彼女は既にドラストのものであったからである。そこで、アリドールは提案する。

「心を決めなさい。あなたの勇気か私の絶望かどちらかが今晩示される。舞踏会から不幸を捨てて私の後に従うために抜け出て来なさい。そうでなければ、僕はあなたの眼の前ですぐ

に死んでしまうでしょう。私が死ねば満足なさいますか。」[54]

ドラストがアンジェリックとの結婚を祝して開こうとする舞踏会から抜けでて、アリドールとともに出奔しようとの提案であるが、その大胆さと危険にアンジェリックはためらい世間の評判に気がねする[55]。それでも、愛していないドラストと結婚するhorreur[56]を思えば、彼女は勇気をふるって同意するしかなかった[57]。こうして、彼女は真夜中ひそかに出奔しようとするが、実はすべてがアリドールのしかけた罠であり、彼女を待っている相手はクレアンドルだったのである。アリドールの言葉はアンジェリックをおびきだすための甘言にすぎなかった。

アリドールがアンジェリックにした振舞は以上の通りであるが、こんな不当なことを自分の愛人にする「コルネイユ的英雄」は存在し得ないのである。彼は平然と嘘をつき卑劣な策略をめぐらしている。彼はアンジェリックをおびきだすことに成功したあとで、「策略や飾りたてた言葉に不可能なものはない。」[58]と高言しているが、このような人間に何らかの優越性を認めることはできないことである。

アリドールの自負する優越がまがいものにすぎないことを明白に示すのは、アリドールにおける勇気の喪失である。ドラストに恋する女を横どりされたクレアンドルは、彼に決闘をいどんでアンジェリックの奪還をはかる。

「愛人か死かどちらかをドラストから手に入れるのだ。彼に勇気があるなら彼女をまもることだ。彼女を手に入れるか、譲りわたすかは剣が決めることだ。」[59]

ところが、アリドールはクレアンドルの考えをしりぞけ前述したような策略を提案する。アリドールは「剣をふるわないで、彼女を君のものとしたいのだ。」[60]と言っているが、剣からの逃避は英雄主義とは全く相容れない。アンジェリックをクレアンドルに誘拐させようとする策略は失敗に終り、アリドールは彼女と相対する。彼女は一緒に駆け落ちするように求めるが、アリドールの答は次のようである。

「パリで夜中に、美しい女がたった一人の男についてゆくのは不用心なことです。ドラストか運悪く夜盗かが襲ってきたら、あなたを守ることはできないかもしれない。もう一日待ってみよう。」[61]

これに対するアンジェリックの返答は、簡潔ながらアリドールのいっさいを語っている。

「あなたには、愛も勇気も欠けている。」[62]

アリドールの臆病さはこのようにして暴露された。アリドールが優越意識を抱き、自己を他の凡俗より区別されるべき優者としようとしたことは彼自身の言葉が示している通りである。しかし、アリドールの主観的自己把握よりも、客観的に明らかとされたアリドールの現実の姿を見るべきで

あろう。アリドールは優者ではあり得ないのだ。彼が時に口にする「英雄的」な言辞に幻惑されることなく彼の言動を直視するならば、アリドールに見られるのは優越ではなく堕落であり、何らかの純良さのただよわす芳香ではなく腐臭でしかないことがわかるであろう。それは、さすがのアリドールも自己の行為が卑劣な裏切りであると一瞬思う[63]ほどであったのである。「コルネイユ的英雄主義」が善悪を問わず示している「魂の偉大」[64]をアリドールに求めることができないのは以上で明白である。

アリドールのこのような本性をみるならば、彼の優越意識がブルジョワ的な卑俗な「所有」の愛を拒否し、ドルトによれば「所有」ではない貴族的愛[65]、ナダルによれば「英雄的愛」の確立を志向したのだとするエロイックな解釈は不十分であると言わねばならない。事実は、アリドールが示した「所有」への反発はことの半面をあらわすにすぎなかったのである。

5

コルネイユは、『王宮広場』の自作吟味のなかでアクシオンの単一が破られていることを指摘している[66]。コルネイユのアクシオンの単一に関する議論とてらしあわすならば[67]、偽手紙の件でアンジェリックの愛を破ることに成功したアリドールが彼女をクレアンドルに譲り渡すために誘拐をくわだてるにいたった必然性が認め難いということである。コルネイユが次のように言っていることでも、コルネイユの見解は明らかである。「アリドールのもった愛は愛人を攻撃して追い払おうとするくらいに彼を苦しめるのであるから、彼女をドラストのものとすることになった初めの一撃で満足し、友人の利害にかかわりあって自分の貴重な安らぎを危険にさらすべきではなかったであろう。」[68]アリドールが友人のために再びアンジェリックに接近することは、彼自身の考えにも反することで誘拐をくわだてる必然性が薄いことは確かである。しかし、誘拐がまったく余計で偽手紙という策略と全然関連しないと言うこともできない。アクシオンの単一をあえて破りながらも偽手紙と誘拐の二件を描いた劇作家コルネイユの詩的、芸術的本能を信じ、二件を結びつける必然性を探しもとめねばならない。

実際、アンジェリックを誘拐しようとするくわだては重要な意義をもった不可欠なものである。アリドールがアンジェリックの誘拐に着手したのは、表面上はアンジェリックをクレアンドルに譲るという約束を果たすためである。しかし、友人のためというより自分のためであったことはアリドール自身も認めている通りである。

「これは彼に恩恵を与えるというより自分を満足させるためだ。」[69]

アンジェリックを誘拐してまでクレアンドルに所有させようとしたことは、アリドールの内部から

の欲求のためであったのであり、それはアンジェリックを所有しようとする彼自身の欲求に他ならなかった。彼はアンジェリックの所有を拒否しながらも、アンジェリックを所有しようとする抑え難い欲望をもっていたのである。従って、アンジェリックを誘拐するくわだてとはアリドールによるクレアンドルを介するアンジェリックの間接的所有を意味しており、アリドールの愛にとって必須であったのである。

アリドールがアンジェリックとの愛にひそむ「所有」に反発したことは、彼の愛の半面を言ったにすぎない。正確に言えば、アリドールは「所有」に反発するとともに「所有」を欲したのである。「所有」への反発はアンジェリックとの愛の破棄にむかわせ、「所有」への欲求はクレアンドルを媒介とするアンジェリックの間接的所有へとむかわせたと言えよう。

アンジェリックの所有を拒否したアリドールのアンジェリックを所有しようとする欲望は、彼女を友人のクレアンドルに譲渡するという屈折した形であらわれたが、クレアンドルがフィリスと結ばれてしまって間接的所有が不可能となると、アンジェリックを直接に所有しようとするあからさまな形となってあらわれる。即ち、アリドールはアンジェリックの愛を得ようと再び努力しはじめるのである。ここでも、コルネイユはアンジェリックとの愛を破ったアリドールが再び彼女を愛しはじめようとするのは首尾一貫していないという意味の批評を下しているが[170]、その首尾一貫性の欠如はアリドールのもった「所有」への反発と欲求という矛盾に由来しているのであり、単なる劇的技巧の問題と考えられてはならない。

アリドールは「所有」の愛を否定して、「所有」を超越した優者として「所有」ではない愛を創建しようとしたのではないのだ。確かに、アンジェリックとの愛が第一義において「所有」の愛として成立しており、それが彼の個我によってよりも「所有」という本来愛にとって無縁な物質的社会的論理によって存在していることに苦しみ、また屈辱を感じた。そこから、アリドールの「所有」への反発が生まれた。彼の言葉を借りるならば、圧制、強制でしかない愛の破棄はこのようにしてなされた。しかし、「所有」を否定してしまうことはアリドールには不可能であった。当時の貴族やブルジョワジーが自らの生存の目的とした所有の増大運動に彼も加わらないではいられないからである。所有の増大運動に超然として生きることのできないアリドールが「所有」を否定したり、自己を、「所有」を超越した者としてうちたてることができないのは当然である。アリドールもフィリスと同じく「所有」を望んでいるのであって、「所有」への打ち消すことのできない欲求はクレアンドルを介してのアンジェリックの間接的所有を求めるという屈折した形をとってあらわれたのである。アリドールの愛とは、彼にとって至上命令であるべきあるいは義務というべき「所有」の受容を回避しようとする不可能なくわだてとして存したのである。

当然なことに、彼の理想の愛は自己撞着とならざるを得ない。「愛の鎖のただ中にあって自由」[71]な愛とは、「所有」でありながらも「所有」ではない愛を意味していたのである。言うまでもなく、そのような好都合な愛はどこにもない。「所有」であるとともに「所有」でない愛を願ったアリドールは、そのような愛を見つけることができなかったばかりでなく現実の愛をも失ってしまった。もしこのような言い方が許されるならば、アリドールは「所有」を完全に受け入れるか、「所有」を完全に放棄するかどちらかを選ぶべきであっただろう。フィリスのように、当時の愛の唯一の現実的形式であった「所有」の愛に生きるか、あるいは「所有」を完全に放棄することによって愛の英雄主義に達するかである。しかし、「所有」への反発と欲求という矛盾のうちにあったアリドールには、どちらの愛も不可能であり愛から絶縁するしかないことになる。これから、彼は二度と愛に惑わされることなく生きてゆくであろう。アリドール自身が言っているように、愛から永久に別離することによって彼の真の人生は始まるのかもしれない。

「傲慢な愛よ、おまえの弱々しい力なぞなんでもない。私がのぞみを抱いていたからこそおまえの力はあったのだ。今日、彼女の絶望[72]は私からそののぞみを奪った。私はのぞみを捨てて生きはじめる。私はこれから生きてゆく。自分の流儀で生きてゆくから。」[73]

しかし、あらたに始まったアリドールの愛のない人生が未来をもっているのかどうかは誰にもわからないことであろう。ただ、エピローグをなしているアリドールのスタンスが示す喜劇の終末にそぐわないメランコリーは、アリドールの人生が出口のない袋小路に入ってしまったことを暗示しているかのようである。

＜注＞

(1) cf Ce n'est que me vanger d'vn an de seruitude, v. 950

P. Corneille La Place Royale ou l'Amoureux extravagant éd. par J.C. Brunon Didier 1962

『王宮広場』からの引用はこの初版本により、以下行数によってのみ示す。

(2) 二人の愛の真率さは、二人のそれぞれの台詞に明瞭にあらわれている。

Alidor a mon coeur & l'aura tout entier, v. 40

Me feindre tout de glace, & n'estre que de flame !

La mépriser de bouche, & l'adorer dans l'ame !

(3) アリドールはアンジェリックについて次のように言っている。

Outre que ma Maistresse, aussi chaste que Belle,

De la vertu parfaite est l'vnique modelle,

Et que le plus aimable & le plus effronté

Entreprendoit en vain sur sa pudicité, v. 289—92

(4) cf Mon carosse est parti, mes gens ont fait retraite ; v. 1142

この台詞から、アリドールは華美な馬車を乗り回して配下の者をいつも従えていることが知れる。このことは、彼を貴族と断定するに十分な根拠を与える。

(5) cf Couton ≪l'interprétation d'Alidor pose des problèmes, et cela même établit la qualité de cette comédie≫ Corneille, Théâtre complet Garnier 1971 p. 474

(6) cf Lemaitre ≪cette conception bizarre et fausse de l'héroïsme était si naturelle à Corneille qu'on la pressent déjà dans ses premières comédies. La plupart des héros et surtout des héroïnes de son théâtre tragique sont de la même famille que ce surprenant Alidor de la Place Royale quittant sa maîtresse qu'il aime, sans but, sans raison, pour le plaisir d'éprouver sa propre volonté et de se sentir fort≫ cité par Le Brun, Corneille devant trois siècles Slatkine Reprints 1971 p. 127

(7) cf Nadal, le sentiment de l'amour dans l'oeuvre de Pierre Corneille Gallimard 1948

Dort, Pierre Corneille L'Arche 1957

Doubrovsky, Corneille et la dialectique du héros Gallimard 1963

(8) A. Adam, Histoire de la littérature francaise au XVIIe siècle t, I Del Duca 1962 p. 497

(9) La Galerie du Palais v. 573—7 Corneille, oeuvres complètes par A. Stegmann Seuil 1963

(10) Nadal, op. cit. p. 104

(11) ibid. p. 111

(12) cf ibid. p. 115

(13) cf ibid. ≪Mais aux nobles élans qui, par moments, emportent Alidor vers de sévères climats, S'ajoutent des sentiments moins généreux. On entrevoit chez lui un fond ténébreux d'égoïsme et de pauvreté. Il proclame magnifiquement la gratuité de l'amour, entend remonter à sa source qui est l'esprit ou la liberté ; mais en même

temps sa conduite, et parfois son langage, nous révèlent qu'en lui profondément règnent les contraintes de l'égoïsme et de l'amour de soi.≫

(14) cf G. Lanson ≪Dans les comédies de Corneille vit le grand monde du temps de Louis XIII.≫

≪Le cadre, les circonstances, les accessoires de la comédie, tout est réel.≫ Corneille Hachette 1898 p. 51, 53

(15) G. Mongrédien, La vie littéraire au XVIIe siècle Tallandier 1947 p. 206

(16) 田中敬一氏の論文が実例をあげて詳細に示している。田中敬一「コルネイユ初期コメディにみられる結婚と恋愛」静岡大学人文論集21号

(17) B. Dort, op.cit.p. 46

(18) cf. 伊地智均「Cinna における国是の確立」Gallia X-XI p. 43-45

(19) 富の増殖、土地、官職、ラントの獲得、結婚等において具現化されたブルジョワジーの所有の増大運動という意味で「所有」を使用する。

(20) v. 63-8

(21) v. 79-84

(22) v. 1296-1300

(23) v. 1301-5

(24) cf Sçachez que mes desirs tousiours indifferents

Iront sans resistance au gré de mes parens,

Leur choix sera le mien, c'est vous parler sans feinte. v. 1308-10

(25) v. 1422-5

(26) フィリスがクレアンドルに言った言葉に結果は示されている。

Le monde vous croit riche, & mes pares sont vieux. v. 1313

(27) 「所有」の愛の堅固さについては、ドルトの言うブルジョワ的確信という概念によって了解されよう。cf Dort ≪A l'origine sont les couples. Ni doute ; ni incertitude : ces couples sont formés sûrement. Ils avouent et ils célèbrent leur unité. Aucun personnage de Corneille ne s'interroge sur l'autre, sur sa possession.≫ op.cit. p. 46

(28) v. 195-200

(29) v. 191-2

(30) v. 222-6

(31) cf I'ay honte de souffrir les maux dont je me plains,

Et d'éprouver ses yeux plus forts que mes desseins ; v. 227−8

(32) v. 212−20

(33) cf Nadal, op.cit. p. 111

(34) v. 218

(35) v. 220

(36) La Place Royale éd. par Brunon p. 117

(37) ibid.

(38) cf ibid.p. 117

ステグマンの最近の研究は、匿名の宛先人をHenri de Campionに擬し、彼をアリドールのモデルと考えることもできるといっている。だが、まったくの推量であり献呈文を仮構とする従来の説に従うべきであろう。

cf A. Stegmann, Corneille oeuvres complètes Seuil p. 149

ditto, L'Héroïsme cornélien t.1 Colin 1968 p. 31−32

(39) コルネイユがアリドールにsympathiqueであったかどうかについて評家の考えは割れているが、ここで相対立する二論をあげておく。

Couton ≪Faut−il, comme on l'a fait, voir avec Alidor s'annoncer l'éthique cornélienne, organisée autour de la volonté? C'est beaucoup dire, Il y a dans le personnage plus de caprice que de volonté véritable et Corneille l'a dénoncé comme extravagant≫

Doubrovsky ≪c'est la convergence, ou, si l'on veut, la connivence des points de vue d'Alidor et de Corneille.Un même esprit, un même élan animent l'analyse du personnage, dans la pièce, et de l'autheur, dans la critique.≫ op.cit.p. 63

(40) v. 230−2

(41) 原語はposseder, ここでは結婚すると同義である。posseder が肉体的所有のみを意味するという狭い解釈はとらない。posseder は肉体の所有であるとともに肉体を通しての家産、諸々の経済的社会的受益の所有でもあって、われわれの使用する「所有」を意味すると解される。ブリュノンは次のような注解を付している。cf Brunon, ≪s'assurer par le mariage la légitime possession d'une fille≫ op.cit.p. 146

(42) v. 233

(43) v. 1151

(44) v. 207−8

(45) cf B. Dort, op.cit.p. 37−40

(46) v. 247−50

(47) 原語は générosité 及び généreux,

(48) この手紙にはアンジェリックへの悪口が書かれている。

(49) v. 389−92

(50) v. 393−4

(51) v. 817−20

(52) アリドールの不忠を知った後も、彼女の愛は消えなかった。

cf Que ie m'anime en vain contre vn objet aimable !

Tous criminel qu'il est il me semble adorable, v. 449−50

(53) cf (Doraste) Demain vn sacré noeud me ioint à cette belle v. 634

(54) v. 851−5

(55) cf Mon, mais que dira t'on d'vn tel enlevement ? v. 856

(56) v. 776

(57) アンジェリックには、コルネイユが認めるように愛におぼれすぎたという非難が加えられようが、彼女の過失は人間的なものである。cf Corneille ≪Le caractère d'Angelique sort de la bienseance, en ce qu'elle est trop amoureuse, & se resout trop tost à se faire enleuer par un homme, qui luy doit estre suspect.≫ éd. par Brunon p. 114

(58) v. 906

(59) v. 740−2

(60) v. 748

(61) v. 1143−7

(62) v. 1148

(63) cf Ce traict est vn peu lasche, & sent sa trahison, v. 943

(64) Une grandeur d'âme

(65) cf Dort, op.cit. p. 37−40

(66) cf Corneille ≪il y a manifestement vne duplicité d'action.····Ces deux desseins formez ainsi l'vn après l'autre font deux actions, & donnent deux ames au Poëme≫

éd. par Brunon p. 113

(67) cf Discours des trois unités d'action, de jour, et de lieu éd. par Stegmann p. 84

(68) éd. par Brunon p. 114

(69) v. 941

(70) cf Corneille ≪Alidor semble ne commencer a l'aimer veritablement que quand il luy à donné sujet de le haïr. Cela fait vne inégalité de Moeurs qui est vicieuse≫ éd. par Brunon p. 114

(71) v. 212

(72) アンジェリックは世を捨てて僧院に入ってしまう。

(73) v. 1575−79